

図書館だより

図書委員会

お薦めの本特集号②

今年度赴任された先生方にお薦めの本を紹介していただきます。今回は国語科の塚田愛美先生と美術科の浦和瞳先生、保健体育科の成川慶太先生です。

『猫を抱いて象と泳ぐ』

小川洋子 著

天才チェスプレイヤーが天才と謳われるまでとその幕引きの物語。そう記すと、一見華々しい物語のように思われますが、実際は、華々しさといったものから随分とかけ離れた作品です。主人公は非常に内向的で、社会の外側で殻の内に閉じこもっており、その主人公に大きく影響を与えた人物もまた、社会とは遠く離れた場所にいます。主人公がチェスにのめりこんでいく様は、万人に受け入れられず、また自分も受け入れることができない息苦しい世界で掴んだ糸に縋るようで、現実からの逃走に似ています。しかし、書き手はその逃走を肯定も否定もしません。ただただ一途な主人公の目に映る、美しく静謐な世界を柔らかな言葉で綴ってゆきます。

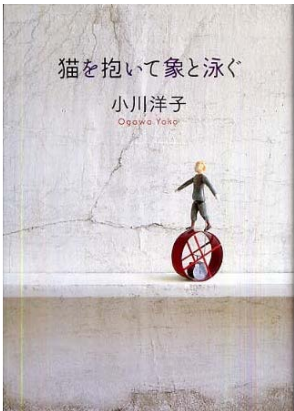
私は、何かにこだわりがある人間は強いと考えます。こだわるものはなんだったかまいません。本書はチェスの天才の物語ですが、天才と呼ばれるような高みに上り詰める必要ありません。また、他者から見れば全く無価値なものであったとしても、自分の中に確固たるものがあれば、それで十分です。私事ですが、私は「言葉」に酷くこだわります。言葉に対する感覚や、価値観は、人に説明し難い・理解され難い部分が私の中にあります。しかし、それをどうにか一般化しようと思ったことは一度としてありません。我ながら面倒な性格だなど思う反面、言葉一つ一つに心を砕く自分が好きです。このこだわりは、私の生き方のポリシーにもなっています。人との付き合い方も、物に対する考え方も、全てこのこだわりが軸となっています。主人公は最初から最後までこだわりを貫く人間でした。貫く、というほど力強いものではありませんが、確かに揺るがないものがありました。私はそこに強く共感しました。美しさを見ました。繊細で哲学的に語られるチェスと人間の美しさです。高校生の皆さんは、これだけは、というこだわりはありますか。こだわりは知らず知らずのうちに自身を形作ります。これから多くの選択肢がある皆さんは、ぜひとも自分のこだわりを見つけ、大切にしてください。

著者小川洋子は独特の作風で知られています。物語に所謂ヤマがなく、流れるように綴られます。

寓話のようであり、現実と非現実の境を彷徨う感覚は心地よく、不思議と引き込まれます。なお、本書を読む際にチェスの知識が全くなくとも問題ありません。優しく繊細な言葉が、読者を棋譜の穏やかな大海へ導きます。透明感と美しさはもちろんのこと、他作品で現れる奇妙な毒々しさも味わってほしい、多くの魅力持つ作家です。私の中のナンバーワン小川洋子作品は本書ですが、他の作品でも小川洋子の名を見た際は、ぜひとも手に取ってください。

塚田 愛美先生

塚田先生お薦めの小川洋子の本ベスト7

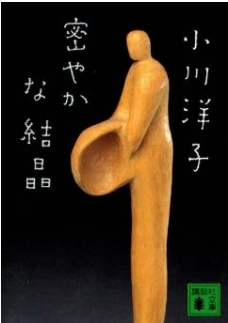


1位 4位 6位の
本は図書館にあります。他は注文中。

2位



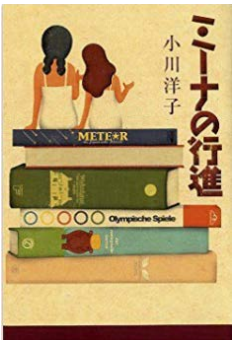
5位



3位



6位



4位



7位



小川洋子 [オガワヨウコ]

1962（昭和 37）年、岡山県生れ。早稲田大学第一文学部卒。

1988 年「揚羽蝶が壊れる時」で海燕新人文学賞を受賞。1991（平成 3）年「妊娠カレンダー」で芥川賞受賞。主な著書に『やさしい訴え』『ホテル・アイリス』『沈黙博物館』『アンネ・フランクの記憶』『薬指の標本』『夜明けの縁をさ迷う人々』『猫を抱いて象と泳ぐ』等。2004 年『博士の愛した数式』で読売文学賞、本屋大賞を受賞。『ブラフマンの埋葬』で泉鏡花文学賞、2006 年『ミーナの行進』で谷崎潤一郎賞受賞。翻訳された作品も多く、海外での評価も高い。

『おんなのいとば』

茨木のり子 著

この本は、戦後を代表する女性詩人・茨木のり子の詩集である。茨木の詩は、国語の教科書に掲載されたり、ＴＶ番組などに取り上げられたりと馴染みがある。中でも、「自分の感受性くらい」という詩が好きだ。初めて読んだ時、胸ぐらを掴まれて乱暴に体を揺さぶられ、はっと目が覚める感覚に陥った。しかし、暫くすると、洗練された強く美しいことばが優しく心に沁みわたってきた。とても不思議な感覚だった。その詩は、「自分の感受性くらい 自分で守れ ばかものよ」という言葉でしめくくられている。単純で恥ずかしいが、なんて潔くてかつこいいんだ！というのが初めて読んだ感想だった。怒涛の時代を生き抜いた茨木だからこそ紡ぎ出すことができたことばであり、とても説得力がある。

ことばは、その時の自分の精神状態によってもアプローチの仕方が変わってくると思う。何かに悩んでいる時、何かに挑戦している時、何かを探している時、何かに不安な時・・・、特に 何もなくても、詩に限らず、様々な本を読んでおくと、自分の気持ちに引かかえることばを見つけることができる。高校生の皆さん、お互いに素敵な本を見つけ合いましょう。

浦和 瞳 先生



この本は注文中ですが、他の茨木のり子著の本が10冊あります。

『秘密』

東野 圭吾 著

「本なんて絶対読まないし、面白さが全く分からない！」私は中学1年生の時までそう言っては全く本を読んだことがありませんでした。放課後は暗くなるまで外に遊びに行き、本を落ち着いて読むことができるだけの集中力もありませんでした。ちゃんとした文章を読んだことがあると言えば国語の教科書の話くらいでした。そんな落ち着きのない私でしたが、当時同じクラスの好きだった女の子が何かの本を休み時間に読んでいるのを見えました。私はどうにかその子と話がしたくて「その本面

白そうだね！読み終わったら貸して！」と言ってしまいました。そして「すごく面白かったよ！」と貸してもらったのがこの「秘密」という本でした。しかし、もう一度冒頭を読み返して頂けると分かるが、私は当時本をともに読んだこともないし、文章が大嫌いなやんちゃ坊主です。しかし好きな子に本を貸してもらっておいて、感想も言えないのでは男として情けない。さて困った。この葛藤と格闘の末、覚悟を決めて読み始めることにしました。

「予感めいたものなど、何ひとつなかった。」物語はこの一文からスタートします。主人公の杉田平介は自動車部品メーカーで働く三十九歳。妻の直子と十一歳の娘の藻奈美との三人で暮らしていました。ところが、一九八五年の冬、直子の実家に行く為に直子と藻奈美の二人が乗ったスキーバスが崖から転落してしまうのです。直子と藻奈美は病院に運ばれたものの、妻の直子は死んでしまいます。一方、娘の藻奈美は、奇跡的に助かることができました。絶望の中で妻の葬儀が行われたその夜、娘が意識を取り戻しました。しかし、娘の体に宿っていたのは、死んだはずの妻だったのです。妻にしか分からない話や妻との思い出話などが成立し、娘の体をした妻が目の中にいるのです。その日から杉田家の切なく奇妙な「秘密」の生活が始まりました・・・

どこにでもあるような入れ替わりの話かと最初は思っていました。ですがこの本では生きるということや、親子の愛情、そして夫婦の絆がものすごく綺麗に、かつ深く書かれています。すれ違いとギヤップ、そして、運命。事故の被害にあった家族達も、事故を起こして逝ってしまったバス運転手にも、家族にかかわる複雑な背景があり巧みでよく練られたストーリーです。それでいて、当時本を全く読まなかった私でもスラスラと読める読みやすさの中に絶妙な人間心理と意表を突く展開が繰り広げられます。この本を読んて以来、本の面白さを知り、様々な本を手取るようになりました。読み手の心を揺さぶり続けながら、最後までぐいぐい引き込む。そして、そのまま感涙路線で終わるかと思つたら・・・

本当の「秘密」の意味を知るラスト、なんともいえない衝撃が走ります。

成川 慶太 先生



この本は注文中ですが、他の東野圭吾の本は多数あります。

東野圭吾 [ヒガシノケイゴ]

1958年、大阪生まれ。大阪府立大学電気工学科卒。エンジニアとして勤務しながら、1985年、『放課後』で第31回江戸川乱歩賞受賞。1999年、『秘密』で第52回日本推理作家協会賞受賞。著書に『同級生』『変身』『分身』『鳥人計画』『むかし僕が死んだ家』『パラレルワールド・ラブストーリー』『天空の蜂』『毒笑小説』『名探偵の掟』『悪意』『探偵ガリレオ』『白夜行』『予知夢』『片想い』等があり、幅広い作風で活躍している